The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「うまくいかなかった」事例から
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11804
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「うまくいかなかった」事例から

高橋　綾

［事例］
男性Ｉさん
（お昼の休憩を終わって、４階のお手洗いに行ったときにたまたま廊下で出会い、デイケア室まで車椅子を押していったが何もやっていないので、今度は２階の病院のロビーに行くとおっしゃったので、一緒について行った。二階のロビーでしばらく外を見ながらお話をした。長くいる方らしく、入り口を通るときに声をかけて行かれる知り合いの方ともお話しておられる。家族と一緒にお見舞いに来た子供たちを楽しそうに眺めておられた。）

Ｉ：外は雨が降っていて出られないねー。
Ｔ：きょうは雨が降っていて、外に出られなくて残念ですねー。いつもはお天気がよかったら外に散歩に行ったりされるんですかー。
Ｉ：近くだけだけど散歩に出たりするんだがねー。今日は雨で外には出られないねー。
Ｔ：そうですねー。もう少ししたら外はあったかくなるし、桜も咲くしきれいでしょう。
Ｉ：（外の木を指さして）あれが桜の木で、春になったら花が咲く・・・
Ｔ：早く外にでて散歩できるような季節になったらいいですね
Ｉ：昔なら遠くまで散歩に行けたけど、脚を悪くして・・・

◆なにか過去のことにさかのぼるような話にしたらいいのか、と思ったけれど、それ以上聞けなかった。
そのような話をしている間にも、受け付けに来る小さい子供たちに、しきりに目を細めて楽しそうにしておられるので・・・

Ｔ：ちいさいこはかわいいですねー。おじいちゃんは小さいお子さんがお好きなんですかー。
Ｉ：ちいさいのはかわいいねー。ここ（ロビー）も雨じゃあなかったら、ちいさいのがいっぱいいて、寄ってきたりして楽しいのに・・・
Ｔ：きょうは雨で人が少なくて寂しいですね。
Ｉ：人が少ないとねー。
Ｔ：でもここは上の部屋よりも人がたくさん出入りするから、にぎやかでいいですね。
Ｉ：ここはにぎやか。雨でなかったらもっとにぎやか。

（というようなことをしばらく話している、寒くなってきたしそろそろ戻りましょうかといって６階に戻る）

＜コメント＞

ここでわたしはこの自分の会話記録を「うまくいかなかった」例と（とりあえず）位置づけ、そこから考えられることを反省も含めてすこし考えてみたい。

「うまくいかなかった」例をとりあげようと考えた理由は、村田氏の「傾聴」の技法、目的を意識し、それと比較して反省するなかで、何人かの人が自分のした会話を「うまくいかなかった」と感じたことがあったということで、むしろその「失敗」や「違和感」に、「傾聴」と今回私たちがとりくんでみたことの差異が見えているのではないかと考えたからである。

村田氏の「傾聴」における目的は明確であり、それは簡単に言えば、相手の話を受動的に「聴くこと」によって、精神的な「ケア」を行うことである。こうした「傾聴」の理念からは「うまくいった・いかなかった」という結果、反省が導き出せると思われる。

自分の会話記録を振り返ってみると、「傾聴」としては「うまくいかなかった」と考えられるようにも思えるが、まったく無意味な会話であったとも思えない。「うまくいかなかった」という反省は「ただ話し相手になること」はできても、「相手の核心にせまること」はできなかった、というふうにも言い換えられるかもしれない。村田氏の傾聴でもただの「おしゃべり」ではなく、相手のスピリチュアルなニードに耳を傾けることが必要だとされている。

しかし実際初対面の人の話を多少意識的に聴くということをしてみて感じたのは、話の「核心」、あるいは村田氏がスピリチュアルなニードと呼ばれるようなことは、相手がもともとそれを持っているというのではなく、話の中でおそらく偶然にでてくるようなものなのではないか、ということである。

この点については、今回の実習の反省会でも話題になり、何人かの方の意見を聞くことができた。そのなかでは、スピリチュアルなニードがどの人にもあるのか、ということはその時のタイミングによっていたりして、偶然的なものと言えるので、普段表出できないものを引き出してあげるという点では、スピリチュアルなものと「表層」のものはそれほど区別しなくてもいいし、日常のコミュニケーションとそれほど差がないのではないかという意見や、施設にいること自体の違和感、孤独感、年をとっていくことの不安感、そうしたものをまぎらわすために誰かと話していたいということもあるので、傾聴されることの内容は傾聴される人が持っているいろいろなレベルを含んでいるのではないかという意見が聞かれ、参考になった。また、わたしのお話ししたＩさんはもと神父さんということもあって、自分のスピリチュアルなニードには敏感なはずであるから、話がそれ以上展開しなかった、ということはＩさん自身が今はそのような話は必要ない、と考えられたからではないか、という具体的な指摘もいただいた。

ただ、「うまくいかなかった」とはいえ、Ｉさんはいちど話の途中で、「足を悪くして・・・」と過去のつらい経験にさかのぼるような話のとりかかりを示しているようにも思われ、そこでわたしがそれ以上のことをきけなかったというのが残念である、という指摘もいただいた。言いよどむというのは、これからつらい話になるけど聞いてくれるか、というふうに聞き手の姿勢が試されているのではいか、という看護士の方のご意見が大変印象的であった。あとで考えてみると確かに、わたしの「うまくいかなかった」というもやもやの中には、たしかにあのときもっとしっかり話の続きを聞けばよかったのではないか、という後悔も多少あるように思えた。ただそれ以上に踏み込めなかったというところに、わたしが「ケアするもの」として、すでにある枠組みの中で、そのトレーニングに行ったのではなく、臨床哲学の学生という立場で、「ケアとは何だろう」「ケアの現場とはどのような所なのだろう」あるいは「私たちにケアができるのだろうか」といった漠然とした問いや不安を携えつつ、教室のそとで初対面の方とお話しするということをはじめて試みたという、その微妙な立場の揺れがあらわれているようにも思われた。

わたしに関して言えば、この会話記録の例ではそうした立場の揺れも含めて、目的としての「ケア」や、「相手のために」話

を聴くということを強く意識しすぎたために、緊張したり、態度が硬くなったりしたということがあったように思う。「ケア」、「相手のために」という目的に強調点をおきすぎたり、それを意識しすぎたりすると、かえって方向づけられた不自然なコミュニケーションになってしまうということがあるのかもしれない。「自然に」話を聴くことができればいいのだが、こうした施設をほとんどはじめて訪問するわたしのようなものにはそれが難しかった。その場合の「自然」というのは「慣れ」のことなのだろうか？

また、うまく話ができたと思えるような場面では、「ケア」をするとか、「相手のために」という意識がどこかにいってしまっていて、「聴くこと」というよりも、その話じたいにのめり込んでいるというようなことがあった気がした。老人保健施設を幼稚園の子どもたちが訪問すると、「おじいちゃんの顔へんやなー」と、職員の方もひやっとするような言葉を子どもが言うときにも、入居者のかたは怒るどころか、むしろうれしそうに見守っているということがあるそうである。もしくはそういった施設でペットとして動物が飼われたりすることがある。そのことがもし「ケア」と呼びうるならば、その場合の「ケア」とはどういうことをいっているのだろうか。「相手のために」という目的がなくても、あるいは「相手のために」という意識が消えたときにうまく「ケア」ができた（ような気がする）というのはどういうことなのだろうか？

臨床哲学の授業では、「ケアとはなにか？」という問題をめぐって議論が重ねられてきたが、今回、「実習」という形で、実際「ケアの現場」と呼ばれているところに出かけてみて、そうしたところでは、簡単に「ケア」できたとか、「ケアになる／ならない」とか言えないような様々なレベルの出来事が起こっているということを、実感できたと思う。この経験を生かして、「ケア」に関しても、個々の事例にそくして細かに考えていくことができれば、と思う。

（たかはしあや　博士前期課程）